

### 国文学者・久松潜一の出発点をめぐって

衣笠, 正晃

---

(出版者 / Publisher)

法政大学言語・文化センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

言語と文化 / 言語と文化

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

(1)

(終了ページ / End Page)

(17)

(発行年 / Year)

2008-01-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003023>

## 国文学者・久松潜一の出発点をめぐって

衣笠 正晃

## はじめに

久松潜一（一八九四—一九七六）は、昭和十年代から戦後の新制大学への移行後にいたるまで東大教授の職にあつて、国文学研究室の主任を務め、国文学研究が時代のイデオロギーの中心的役割を自任した時期において、アカデミアの頂点に位置していた人物である。<sup>(1)</sup> 彼はいわば国文学研究における戦前と戦後の連続性を体現する人物と見なすことができ、その点から近年、安田敏朗や笹沼俊暁らによる批判がなされている。<sup>(2)</sup>

その久松の研究方法ないし学風は、国学の近代版として明治期に成立した国文学の延長線上にあるとされる。風景次郎はその国文学研究史のなかで、久松を「国文学の官学的正統を継いだ」人物と位置づけるとともに、その学問は久松にとつての「恩師芳賀矢一が歩いたように、国学、ドイツ文献学による啓発、国文学の形成という線」にそって展開した、と述べている。<sup>(3)</sup>

だが久松を芳賀矢一の延長線上に、文献学的国文学の後嗣としてのみ捉えることは果して妥当だろうか。たとえば一九三〇年代半ばに国文学界のみならず文壇・論壇をも巻き込んで展開されたいわゆる「文芸学論争」においては、近藤忠義らの歴史社会学派、岡崎義恵の文芸学派の双方が、東大国文科を中心とするアカデミックな国文学を

仮想敵として対抗し合うという、三派鼎立的な状況が存在したと考えられている。ところが実際には、国文学アカデミアの中心に位置したはずの久松は、岡崎義恵の文芸学に親近感を表明しているのである。<sup>(4)</sup> また後年の回想録のなかで久松は、「私などは文献学史から出発したために文献学派の中に数えられたが、自分としては文献学の基礎の上に文芸学を確立することを目標とした(傍点引用者)」と述べてさえいる。<sup>(5)</sup>

久松と芳賀の学風の違いあるいはズレを考えるにあたっては、久松の文学史に対する意識を例にとることもできるだろう。芳賀は文学史を「文献学の研究にて、最も重要なもの」と位置づけ、文献学の最終目的を文学史の作成に置いた(『日本文学史』<sup>(6)</sup>)。しかし久松の場合、秋山虔が言うようにその中心となる業績は『日本文学評論史』に集成された批評史ないし文学理論史であって、彼の名が冠せられた多くの「文学史」は実際には概論ないし編著にすぎない。秋山は久松が「文学史家として対象化されることのなかった」事実を指摘しているが、芳賀、あるいは久松の後の世代の風巻に見られるような、文学史そのものを完成させようというつよい志向は久松にはうかがえないのである。<sup>(7)</sup>

以下の小論では、久松潜一の長いキャリアの初期にあたる大正から昭和初め(一九一〇年代から二〇年代)の時期に注目し、その段階における彼の研究のあり方を検討することによって、久松の明治期国文学からの偏差を考えたい。またそれによって、従来一種の空位期間と考えられがちであった大正期国文学の独自のあり方を再検討する契機をつかみたいと思う。

## 一 大学における文学

最初に久松の学問的な形成期に注目するため、彼が大学において(とりわけ文学に関して)どのような教育を受けたのかを考えてみたい。神野藤昭夫は制度としての近代国文学が確立した時点を芳賀矢一(国文学)と上田万年(国語学)による分業体制が確立した一九〇一—二二年前ごろにおいている。<sup>(8)</sup> スタッフや講座制度の問題を考える限り

その見方は妥当であると考えられるが、ここでは学生の側からの実際の履修のあり方に注意してみたい。

橋本鉦市の研究によると、上記のような国文学の制度的完成直後の一九〇四年、当時の文科大学学長・坪井九馬三によって（のちの文学部に相当する）文科大学の制度改革が実施されている。<sup>(9)</sup> この改革のポイントは、外国語教育の重視と学科数の削減という二点に集約される。前者については外国語二ヶ国語の試験合格が卒業要件とされ、後者についてはそれまでの九学科が三学科に統合（国文学科も文学科へと統合）されるとともに、学生は広範囲な科目選択を重ねるなかで時間をかけて専攻を決定することができるようになった。のち一九一〇年の再度の改革で、外国語の比重がやや減じられ、専攻の決定も二年次の最初に行なうことになるものの、その後一九一九年の分科大学制の廃止による文学部への改称に至るまで、外国語重視と自由選択を旨としたシステムが機能していたと考えられるのである。

当時東京帝大に在学した国文学者たちの回想を見ると、高木市之助（一八八八—一九七四、在学一九〇九—一二）は早くに語学試験に合格したため、時間をかけて卒業論文を完成できたと言っている。<sup>(10)</sup> 斎藤清衛（一八九三—一九八一、在学一九一五—一八）の回想では「修了すべき学科単位の規制はあったが、万事が学生の自主自由にかまされていた」と述べている。<sup>(11)</sup> このような制度のなかで学んだ学生は、高木や斎藤、岡崎義恵（一八九二—一九八二、在学一九一三—一七）らの研究姿勢や学風にかがわれるように、国文学専攻の学生であっても西洋語・西洋文学に親近感を保ち続け、国文学という枠にとらわれずに文学を捉えようとする立場をとる者が多かったと考えられる。<sup>(12)</sup> 具体的には、たとえば文学研究の意義を芸術的価値の探求に置き、当時広がりつつあった鑑賞批評の立場を研究に適用しようとする主張が国文学研究者によって行われている。文科大学の機関誌的存在であった「帝国文学」に一九一六年に発表された論文「国文学の研究に就て」で岡田美二は、国文学を「国語国文に依つて芸術家の心理過程の顕現せられたもの」で「芸術の一分野である」と定義した上で、「国文学が芸術の一分野として確立する以上、其研究は、作物それ自体の芸術的価値の批評を其本質とすべき」だと論じている。<sup>(13)</sup> これはのち一九二〇年に岡崎義恵が発表した論文「古文学の研究」での、創作家の主観的な印象批評にかえて現代人にとっての普遍性を認

めるといふ議論に通じるものがある。<sup>(14)</sup>ペイター (Walter Horatio Pater) の名によって代表される唯美主義・鑑賞主義的な文芸批評のあり方は、大正期の文学専攻学生にとっての常識となっていたと考えられ、一九一六年から一九年にかけて東京帝大に在学した久松も、後で引くとおり、ペイターのルネサンス論に依拠した議論をおこなうことになる。<sup>(15)</sup>

しかしこの芸術的価値を重視する立場は、当時の青年たちの間における、文学に人生の意味を求めようとする修養主義ないし教養主義的傾向とない交ぜになったものであって、大学の授業・研究においても人生の意義の解説が求められていたことを指摘しておきたい。たとえば西尾実 (一八八九—一九七九) は一九一二年に文科大学の選科生となったが、芳賀矢一と藤村作の授業を履修してその「文学研究のくわしき・たしかさ」に感心しつつも、「もつと人間としてのぎりぎりの問題を深くほりさげてみたいという、やむにやまれないような意欲」を満たすには足りないと感じ、いったんは退学を考えた<sup>(16)</sup>と述べている。久松も大正初め (一九一二年から一六年まで) の第八高等学校での高校時代、人間性を説く白権派あるいは新理想主義の文学の影響を受けて「人生を語り、人間としていかに生きるかということを考えることが多かった」日々を送ったことを回想し、その「人道的な人間性主義の文学に心をひかれ」る傾向が大学卒業後にいたるまで続いたと述べている。<sup>(17)</sup>

文学教育・文学研究に西欧の文学理論と修養主義的な人生観の双方を求めようとするこうした学生たちの期待に応えたのは、おもに若い世代の教師たちであった。たとえば垣内松三 (一八七八—一九五二) は講師として一九〇九年から一九年まで有職故実と題して国文学研究法についての授業を行ない、エルツェ (Karl Eise) などの学説を紹介しながら、のちの著書『石叫ばむ』『国語の力』などで表現された独自の暗示的な文学論を語っている。<sup>(18)</sup>また前掲の岡田美二の論文でも言及されているが、英文専修出身の松浦一 (一八八一—一九六六) が一九一一年から二五年まで文科大学でおこなった文学概論の授業は、文学科の学科共通科目的な性格を持たされたものであり、西洋文学と日本文学の多様なジャンルにわたる作品を対象とするいわば比較文学的な講義であった。<sup>(19)</sup>松浦の講義をもとにした著書は続々と刊行されたが、久松も東大に入学した一九一六年、前年に刊行された松浦の著書『文学の

本質』(大日本図書刊)を読むとともに、(のち一九一八年に『生命の文学』と題して宝文館から刊行されることになる)授業を受講し、松浦の自宅をたびたび訪問してさえる。<sup>(20)</sup>

松浦の文学論は、国民性などの属性をすべて取り除いた文学自体の本質の解明をめざしていたが、同じく大正年間に人気を博した厨川白村や本間久雄らの、欧米の流行学説の紹介を旨とする文学論とは異なり、愛児や夫人との死別といった痛切な人生経験にもとつきながら、自分自身の文学観を語るものであった。<sup>(22)</sup>青年の久松をつよく魅了したのは松浦その人の人生観であり、求道者としての松浦の姿であったと見られる。また松浦は、一九〇九年に吉田東伍によって刊行されたばかりの『世阿弥十六部集』などを引用し、「幽玄」をはじめとする日本独自の美的概念を高く評価していた。<sup>(23)</sup>このことは生命の発現としての文学を求めていた久松を日本文学の美的理念へと向かわせるにあたって、重要な契機をなしていると思われることができる。<sup>(24)</sup>

## 二 研究者としての出発

久松がその研究者としての出発点となる「契沖の文献学」と題する卒業論文を書き上げたのは、上記のような知的環境のなかでのことであった。そのことを念頭におきながら、彼の研究にあたっての問題意識を検討してみたい。久松自身は契沖をテーマとしてとりあげた理由について、のちに次のように述べている。

自分が最初この研究をはじめに際しての動機は、契沖の古典研究を文献学といふ名称のもとに大体の理解をなし、契沖の学問が日本文献学史上に占める位置を考へて見たいといふ第一目的とともに、自分が将来の国文学の研究に対する方法論に対しても考察して見たいといふ第二目的とを以て試みたのであった。<sup>(25)</sup>

第一の目的とは、言い換えれば、芳賀矢一が「文献学」の概念によって接続した前近代の国学と近代国文学とい

う学史の流れのなかに契沖を位置づけることである。久松が卒業論文に着手するよりはやく、一九一一年にはすでに村岡典嗣の『本居宣長』（警醒社刊）が出版されていた。久松にとって契沖研究は、それをさらに遡って近世国学の発祥点を明らかにする作業だったことになる。

それでは第二の目的である、契沖の仕事の研究から帰納される「将来の国語国文の研究に対する方法論」とはどのようなものだったのだろうか。それはおそらく「註釈」の重視として集約できるのではないかと思われる。久松に契沖の研究をすすめたのは八高時代の恩師、山内二郎であった。久松によると山内は国文学における註釈の重要性を説くとともに、註釈家としての契沖の意義を力説し、その一方で授業ではテキストの「外延的な説明」を一切省略して、生徒を本文の読みに集中させた。<sup>(26)</sup>久松はこうした山内の影響下にあって、文学の本質を捉えるための註釈という観点から契沖の業績を捉えるに至ったと言えるのではないだろうか。

一九二五年に刊行された『万葉集の新研究』は、久松が大学卒業後『校本万葉集』編纂に協力した折の作業もとに、一九二二年から東大で講師としておこなった講義をまとめたものだが、そのなかで久松は万葉研究史のために一章を割き、あわせてドイツ文献学の方法論についての整理をおこなっている（「十六 万葉集研究の発達（主として本文批評と註釈）」）。久松はそこで古典研究を書史的、本文批評的、註釈的、語学的、批評的、文化史的の六方面に区分するとともに、註釈的研究についてエルツェにしたがって、言語的方面（語彙的解釈、文法的解釈、文体的解釈、韻律的解釈）と内容的方面の、都合五つの方面に分類している。<sup>(28)</sup>だがその上で久松は、語彙—文—内容といった段階を立てることは便宜的なものに過ぎず、重要なのは作品の本質を統一的に理解することだとする。さらに註釈と鑑賞・批評との関係についても、その双方が作品の本質の理解にその中心機能を見出すときには「その窮極の到達点は殆ど区別しがたく」なり、両者が融合する、換言すれば「註釈が機械的な機能から深く内面的に入り得る」と述べる。<sup>(30)</sup>そうした整理をもとにして、過去の国学者の註釈的研究について、それがおもに外形的な語彙的研究に偏っていたことを指摘・批判するのである。

このように初期の久松においては内在的な批評への志向性が明確に認められるのだが、ここでさらに、テキスト

の内部に「深く内面的」に入り込む註釈の方向性が、研究者自身の人格の内部へ沈潜するという方向性とあいまったものであったことに注目しておきたい。すでに松浦一に見られたような自己を語るものとしての文学という捉え方を、久松は自らの国文学研究に反映させたのである。同じ『万葉集の新研究』の序では次のように述べられている。

私にとつては、自然や人生を対象として文学作品を産出す過程と、文学作品を対象として研究をまとめる過程とは、結局に於いては一であると思はれる。何れも自己を産出さうとする精神、自己の個性の創造に外ならない。<sup>(31)</sup>

この発言は、高田里恵子が指摘するような、大正期の文学研究者につきまとった創作と研究のあいだの優劣の問題が、久松にとつても切実なものであったことをうかがわせるのに足るものである。<sup>(32)</sup>

### 三 ルネサンスと中世への関心

次に久松は、近世国学を媒介にして、自己解放への欲求、自己の内部への注視という営みを文学史的展望へと転じてゆく。それは近世国学を西欧ルネサンスと同一視することによって可能となったものであった。<sup>(33)</sup>

ここでは久松が東大助教授に就任した一九二四年に発表された論文「元禄時代と文芸復興」に注目しておきたい。元禄時代を日本におけるルネサンスとして捉えるという中心の議論に入るに先立って、序論では久松自身の文学観、あるいは時代思潮の理解が語られている。<sup>(34)</sup> 最初に久松は次のように述べる。

流動もしくは展開といふ言葉は、今の私どもにとつて極めて意味深くまた力強く響く言葉である。流動し展開する事が生命それ自身を現して居る様に思はれる。

したがって文学研究においても「その内面性である人性の展開を跡づけることによつて」文学の展開を理解する必要がありとし、「その意味に於いて初めて生命の文学が作られ、真の意味の文学史が構成される」とする。そしてモールトン (Richard Green Moulton) と「その立場にたつ学者」の議論に賛同するとして、<sup>(35)</sup>「文学の内面性である人性の展開をあとづける事は自己の心の動きを凝視する事に外ならない。自己の心、更に一步を進めて、一人の人間の展開を反省することは、文学意識の展開を跡づける事と結局同じ道をたどる事になるであらう」と言明する。この展開を久松は「素朴な外面的な世界」が「統一された内面的世界」に至り、分裂して「繊細なしかし頹廢した」あり方へと転じるという過程として捉えるが、その頹廢した「分裂の中に統一を求める心の現れ」が「文芸復興」すなわちルネサンスの精神であるとする。そしてその日本における好例を、契沖の国学をはじめとする元禄時代の思想・文化に認めるのである。

しかし同時に久松は、ペイターのルネサンス概念が単なる「古学復興」にとどまらない、「古代精神の復興とともに現実に深く喰ひこまうとする近世的精神を含」んだものであったとして、そうした精神は日本の場合すでに鎌倉時代に認められ、「細いしかししろがねの様な一線を以て元禄時代にまで連続して居る」ものの、中世の非個人的な時代精神によって個性が抑圧されるという限界のなかにおかれていた、とするのである。

人間性をキーワードとして文学の展開をとらえ、また近世国学をルネサンスと結びつけようとする試みを通じて、久松は中世における精神の覚醒という問題に気付くこととなった。J O A K による「国文学ラジオ講座」の中で一九二六年十月十日に行われた放送の原稿にもとづいた文章「近古文学の概論」で久松は、文学における内面ないし精神性を重視するがゆえに、その特質がもっともよくあらわれた中世文学 (近古文学) を、他の時代の文学以上に高く評価している。<sup>(36)</sup>中世文学には外形的な魅力が欠如しているものの、「一步内に入つて、その文学を生み出した精神を考へて見る時、真摯なる人間性の躍動して居るのを見るのである。そこには調和した古典的精神の分裂した跡の苦しさ、それから新しいものを生み出さうとする新生の精神がある事を見るのである」と久松は述べる。それは換言すれば「普遍の生命を求めめる境地」でもあるという。

この中世文学の性格を代表させるチームとして久松は、すでに触れたように松浦一の講義から示唆された「幽玄」をとり上げる。<sup>(39)</sup>久松によれば幽玄は「人間そのまゝの感情が、洗練された表現、型の中に入れられて、その間からひらめき出る白光」、「限りなき生命のひらめき」であり、「みつめればみつめるほど深みのあるものがそこに閃光の如く輝いて居るのを感じる」のだという。「元禄時代と文芸復興」でも登場していたこの光のイメージによって、久松の中世文学観は総括される。<sup>(38)</sup>

近古文学は個性的精神が爛熟しゆきつまつた所から、新しくはじまつて、更に新しい生々とした個性的精神が文学の主潮となるまでの間に於て、普遍性や伝統や型を重んじ、その伝統や型の中からひらめき出るしろがねの如き光を見出さうとした文学であると考へるのである。陰鬱な闇の中にひらめく永遠なるものを見出さうとした文学であると考へるのである。

久松はさらに「近古文学に対する愛着の情すて難いもののあるのを感じる」とさえ言い添えて論文を結んでいるのだが、その後の久松の中世和歌・歌論研究の出発点に、このようなルネサンス精神への注目があつたことを確認しておきたいと思う。

#### 四 文学史から文学評論史へ

上記のラジオ放送とほぼ同時期の一九二六年十月に発表された「国文学を流れる三の精神」<sup>(39)</sup>は、安田敏朗が述べているようにその後の久松の文学(史)理念の原型となつた論文である。<sup>(40)</sup>ここで久松は「まこと」「ものゝあはれ」「幽玄」の三つの精神が持続的に展開することによって、国文学の連続性と一貫性が保持されているという考え方を表明している。

このうち「まこと」は上代文学を貫く「あるがまゝ」の精神であると同時に、爛熟期に復古的精神として登場するものであるとされており、前述の文芸復興の精神と重なるものと考えられる。そして「幽玄」は上述したとおりの中世文学によって代表される精神であり、さらに「ものゝあはれ」は個性的かつ洗練された中古文学によって代表される精神である。「元禄文学と文芸復興」で述べられていた、分裂の中で統一を回復する文芸復興の精神の動きに注目することから始まった久松の文学観は、精神の展開過程をより具体的な時代と結びつけることで複雑化し、既存の文学史との関連性を強化したともいえる。しかし一方で、「まこと」と「文芸復興の精神」を比較すると、後者には感じられた、破壊的な要素を前提とした清新さが弱まり、古くからの不変なもの再生、伝統の不変性が強調されるようになったという印象を受ける。

この「国文学を流れる三の精神」は、昭和に入り一九二八年に刊行された『上代日本文学の研究』に収録されるが、その際に「日本精神と日本文学史」と題する文章が序論代わりに付されている。<sup>(42)</sup> そのなかでは久松は、「個と個との関係的、或は発達の関係を究める」ことを主眼とした「思潮を中心とした文学史」、あるいは「叙事文学、抒情文学、劇文学等の形態的文学史」が台頭した現状を評価しつつも、西洋に発した文学形態や主義をそのまま日本文学に当てはめるには無理があると見て、日本特有の形態ないし文学観に対する認識・理解が必要であると説く。そしてそのような「日本人特有の物の見方、考へ方を統一する精神」を久松は「日本精神」と呼び、「国民性」と見なすのである。ここでは大正期の久松にあつては強調されることのなかった、西欧的要素への警戒感があらわとなっている。<sup>(43)</sup> 具体的な固有名詞は示されないものの、ここで批判されているのは、かつては好意的に引用されていたモールトンやその紹介者である土居光知らであると考えられるだろう。

このように『上代日本文学の研究』におさめられた国文学の精神についての二篇の論文では、オリジナルな文学史理念を提示したいという久松の思いが、つよくうかがえるが、このことは同時期に久松が「批評史」という研究ジャンルを立ち上げ、その体系の構築を図っていたという事実と関連させて理解することが必要だと思われる。

すでに引いたとおり『万葉集の新研究』の序で久松は、文学研究と創作とを等価視するという認識を示していた。

おそらく研究者としての出発点にあって久松は、註釈行為と一体化したものととしての批評の実践と、それを通じての文学の真意義の把握を志向していたはずである。上掲の近古文学の価値とそれに寄せる愛情を語った文章（「近古文学の概論」）は、久松の中の印象批評的な傾向をよく示したものといえるだろう。

しかし国文学アカデミアの中核にあって彼が実現しえたのは、批評行為を対象化し、距離を置いて検討する「批評史」の構築であった。創作と密接に結びつく批評を学問的に整理・検討する批評史は、創作と研究の相剋という大正期の文学研究者にとって共通のアポリアに対して、それを止揚し解決する方策となると考えられた。それと同時に、ジャンル史として従来の文学史には欠けていた部門を補完するとともに、歌論・俳論などの文学論の検討を通じて日本文学のなかから「理論」的側面をとり出し、それによっていわゆる実証的研究によって発見・発掘されつつける膨大な「事実」を整理することで、アカデミックな文学教育のカリキュラム的要請に応えることが期待されたのである。<sup>(44)</sup>「国文学を流れる三の精神」「日本精神と日本文学史」という論文で、久松が文学理念による整理と統一要素としての日本精神を提示したのは、自らの批評史のなかで、個々の細かな事実、個々の作者・批評家の文学観に、体系としてのまとまりを与えるにあたって必要な準拠枠を設定するためだった見ることができらう。<sup>(45)</sup>

### おわりに

一九三六年七月、『日本文学評論史』が刊行されはじめる直前に久松は同時代のアメリカの批評史研究を扱った文章「批評史の研究に就いて」を発表している。<sup>(46)</sup>国文学者の久松が海外の文学研究を直接とりあげたという点できわめて興味深いものだが、この文章の中で久松は、二十世紀に入り英独に比べてアメリカにおいて批評史研究が盛んであることに注目し、ファースター (Norman Foerster) による整理を借りながら、新人文主義 (New Humanism) のバビット (Irving Babbitt) と、審美主義ないしくローチェ主義のスピングァン (Joel E. Spingarn) という、同時代の二人のアメリカの文芸批評家を取り上げて比較を行なっている。

久松はバビットとスピンガンとの間の論争を紹介しながら、それが批評史研究の方法論を見るにあたって興味深いと述べる。久松は両者がともに、雑学的なセインツベリ (George Saintsbury) の批評史研究よりも進歩した段階にあるとして、バビットについても「個々の評論家を語って、而もその中に個人を越えた普遍的なものを語らうとして居るやうである」としている。しかし「批評史の体系」を欠くバビットに対して、クローチエ (Benedetto Croce) の思想・歴史観に大きく影響を受け、「文芸思潮の本質を鋭く直観的に把握して、それによって批評史の体系を編み出さうとする態度」を貫くスピンガンの方に、久松はより大きな共感をよせているのである。<sup>(48)</sup>

この時期に久松が、いずれも大学で教鞭をとっていた二人の批評家に注目したことは、久松の意図を措いても興味深い。視野を広くとって考えるならば、久松もバビットとスピンガンも、ポスト文献学的とも呼ぶべき状況のなかにあった点で共通しており、その状況が久松を彼らへの注目へと導いたとも考えられるからである。

西欧文化圏のいわば周縁にある日米両国では、一九世紀後半に近代的な大学制度が整備されるなか、文学に関しても「科学的」体系と方法論とが必要とされた結果、ドイツへの留学生たちによって文献学が移入され、人文学における覇権を確立した。そして二十世紀、とくに第一次大戦後にいたって、今度は文献学的研究に対する反発が文学部のなかで大きくなる。その際アメリカ・日本のいずれにおいても「批評」が大きな役割を演じることになった。<sup>(49)</sup>

アメリカでは、久松が注目したバビットとスピンガンが、新人文主義と審美主義という立場の違いはあるものの、共通して文学そのものに高い価値を認めるという点で、文学作品を文献資料として扱う文献学に対して一種の共闘勢力を形成し、抵抗・攻撃をおこなった。その違いとは、審美主義者のスピンガンが文学の価値はそれ自体の基準で測られるべきだとし、バビットたち新人文主義者が文学をこの世界にあるべき偉大な価値の体現と見なしたという点にあるのだが、両者の主張はそのまま、次世代のいわゆる「新批評」(New Criticism) へと取り込まれることになる。<sup>(50)</sup> 新批評こそはまさに新たな「科学的」文学研究として文献学の代替物となり、批評をアカデミアの王座に据え、その後長く研究・教育の両面で影響力を振るうこととなったのである。

前節までで検討したように、久松潜一も文学自体の価値という問題をどのように自らの文学研究と結びつけるかという課題に取り組んだ。しかしアメリカでは早くから大学において作文教育が重要な位置を占めるとともに、それを担当するジェネラリストと呼ばれる（研究者ではない）大学教師たちによる文化批評も一定の影響をもつていたのであり、いわば理論化されざる批評的実践の伝統がすでに存在していたことを認識しておかねばならない。久松の取り組みは批評史という体系を構築することで、文献学をいわば内部から変形させる役割を果たしたと考えられるが、その過程で文学自体の価値、あるいは文学性という問題は周縁化されてゆくこととなった。再びその問題を前景化させたのが、文芸学論争にかかわった人々であり、主体的立場からの文学（史）論を提起した風巻景次郎であったのである。

※本文・注ともに、引用文における仮名遣いは原文のまま、漢字は新字体に改めた。

※久松潜一の年譜として、福田秀一（編）『久松潜一博士年譜』（『国語と国文学』一九七六年七月特集号「久松潜一博士追悼特集」）を参照した。

#### 《注》

- (1) 久松は一九二四年に東京帝大助教となり、一九三六年に教授に昇任、一九五五年に退官している。
- (2) 安田敏朗『国文学の時空——久松潜一と日本文化論——』（三元社、二〇〇二年）、笹沼俊暁『国文学』の思想——その繁栄と終焉——（学術出版会、二〇〇六年）を参照。
- (3) 風巻景次郎『古典研究の歴史』『風巻景次郎全集 第一巻』（桜楓社、一九六九年）五八四—五八五頁。同論文は引用箇所はことなるものの『東京大学百年史』でも久松の評価にあたって引用されている。東京大学百年史編集委員会（編）『東京大学百年史 部局史二』（東京大学、一九八六年）七二二頁を参照。
- (4) 拙稿「一九三〇年代の国文学研究——いわゆる『文芸学論争』をめぐって——」（『言語と文化』（創刊号、二〇〇四年）を参照。

(5) 久松潜一『年々去来——国文学徒の思出——』（広済堂出版、一九六七年）一七〇頁。

(6) 芳賀矢一選集編集委員会（編）『芳賀矢一選集 第一巻』（国学院大学、一九八二年）一三四頁。

- (7) 秋山虔「久松潜一博士の文学史観について」(『国語と国文学』一九七六年七月特集号) 六四―六九頁。
- (8) 神野藤昭夫「近代国文学の成立」、酒井敏・原國人(編)『森岡外論集 歴史に聞く』(新典社、二〇〇〇年) 三五頁を参照。
- (9) 橋本鉦市「近代日本における「文学部」の機能と構造——帝国大学文学部を中心として——」(『教育社会学研究』第五九集、一九九六年)。また『東京大学百年史 部局史一』四二―四三頁を参照。
- (10) 高木市之助『国文学五十年』(岩波書店、一九六七年) 五〇頁。なお以下の本文で注記した「在学」の期間には大学院を含まない。
- (11) 斎藤清衛「回想の中から」『広島大学国語国文学会会報』(第六号、一九六二年五月) 一頁。
- (12) 高木、斎藤、岡崎はいずれも第三高等学校の出身であるが、上田敏や厨川白村に影響されて当初は英文学を専攻することをこころざし、のちに国文学へと進路を変更するという軌跡を述べている点でも共通している。
- (13) 岡部美二二「国文学の研究に就て」(『帝国文学』一九一六年二月号) 一四〇―一四一頁。岡部は一九一五年に東大国文学を卒業し、その後山形高校教授となっている(『日本文学報国会(編)『国文学叢話』青磁社、一九四四年、による)。
- (14) 岡崎義恵「古文学の新研究」(『国学院雑誌』一九二〇年五月号)。なおこの論文はのちに『日本文芸学』に再録されている。
- (15) なお久松は一九一九年の卒業後、大学院に進学し、一九二二年に満期退学している。
- (16) 西尾実「教室の人となつて——国語教育六十年——」(国土社、一九七一年) 四五頁。
- (17) 久松「年々去来」一六五頁および一七三頁。
- (18) 石井庄司(編)『垣内松三 国文学史』(教育出版、一九七六年) 付載の石井「垣内学説の成立過程」を参照。なお垣内が講師として招聘されたのは、芳賀が藤岡作太郎の後任として藤村作では不十分と感じたからだという噂があったという(高木市之助『国文学五十年』五九頁)。
- (19) 松浦一は本来英人講師ロイドの後任として着任した(『東京大学百年史 部局史一』七四六頁)。松浦の業績については、松浦「文学の本質」(新版)(白風社、一九七三年)の谷萩弘道による解説を参照。芥川龍之介も松浦の授業の聴講者の一人であり、読売新聞紙上で「文学の本質」の書評をおこなっている(『松浦一氏の「文学の本質」に就いて』、初出一九一六年一月十二日「読売新聞」、芥川龍之介全集 第一巻「岩波書店、一九九五年、一五五―一五七頁」。また私文学者の鈴木信太郎も松浦の授業に出席したことを回想している(『私文事始』「鈴木信太郎全集 第五巻」大修館書店、一九七三年、二六二頁)。
- (20) 久松潜一「思い出」(『英語青年』一九六六年十二月号)。同号には他に熊代莊歩、本田顕彰による追悼文が掲載されて

いる。

- (21) 松浦一『文学の本質』(大日本図書、一九一五年)二一—三頁。
- (22) 久松は石山徹郎の著書『文芸学概説』を紹介した文章(『文芸学概説に就いて』『国語と国文学』一九三〇年八月号)のなかで、松浦の著作を「文学の組織的研究としてよりは氏の文学論の主張であつた」としている。なお前掲久松「思い出」を参照。
- (23) 『文学の本質』の『帝国文学』一九一五年十二月号表紙裏の広告では「先生は時間空間を突破して人間と自然との奥底から文学の根本の意味と其使命とを論述せられ、西洋の文学論の糟粕を嘗むる者を排して文芸の真髄は却つて古来の日本人の芸術的信念の中に一層明瞭なものがあつた」とある。また芥川も『文学の本質』に「旧日本に対する(松浦)先生の思慕」が一貫していると述べる(『芥川龍之介全集 第一巻』一五六—一五七頁)。
- (24) 久松潜一「文学意識を中心とした研究」(『文学』一九三四年七月号)では、幽玄に注目した先駆者の一人として松浦一の名を挙げている。
- (25) 久松潜一「契沖伝」、上田万年(監修)『契沖全集 第九卷 伝記及伝記資料』(朝日新聞社、一九二七年)所収、一頁。
- (26) 久松潜一「恩頼記——国文学棟記——」(湯川弘文社、一九四三年)六九—七一頁。
- (27) 久松潜一「万葉集の新しい研究」(至文堂、一九二五年)。同書は東大国文学研究室編輯「国文学研究叢書」の第一篇として刊行されたが、これは雑誌『国語と国文学』の創刊と同じく当時の国文科主任・藤村作による国文学研究のメディア戦略の一環であつた。藤村は同書巻頭の「国文学研究叢書の刊行について」と題した文章で、学界では「国文学の本質を明らかにし、より一層考察を深めて、大成された国文学史を要求する声」が高まっているとしながら、そのためには「まだまだ部分的に深く探るといふ学者努力の一段階を必要とし、その上にそれ等の成果を集めて総合し系統づける大頭脳の出現」が待たれる、と述べる。ここには学界の指導者として、文学の本質論より言わば実証的な個別研究の積み重ねを優先する方針が明らかにされている(巻頭言一一二頁)。
- (28) 久松『万葉集の新しい研究』四一—五—六頁。
- (29) 久松は、垣内松三、土居光知らが説いた、内容と形式の統一としての「形象」という概念を念頭においていたと考えられる。垣内についてのちに久松は「文学を形式と内容とに分つ態度への批判として形象をといた」ことを評価している(久松潜一『日本文学研究史』、山田書院、一九五七年、三二—三三頁)。
- (30) 久松『万葉集の新しい研究』四二—〇頁。
- (31) 久松『万葉集の新しい研究』序一頁。
- (32) 高田里恵子『文学部をめぐる病い——教養主義・ナチス・旧制高校——』(松籟社、二〇〇一年)を参照。

- (33) 久松潜一「元禄時代と文芸復興」(『国語と国文学』一九二四年十月元禄文学号) 一一—一四頁。
- (34) のちにこの論文が『日本文学評論史 近世最近世篇』(至文堂、一九三六年)に収録された際、以下の序論での文学論は大幅にカットされている。
- (35) モールトンの紹介に大きな役割をはたした土居光知の『文学序説』初版は、この久松の論文に先立って同一九二四年七月に岩波書店から刊行されている。またモールトンの著書 *The Modern Study of Literature* の芦田正喜による訳述書『文学形態論』は垣内松三の序を付して一九三三年三月に宝文館から刊行されていた。
- (36) 久松潜一「近古文学の概論」、藤村作(編)『日本文学論講 中世』(中興館、一九二七年)、一一—一〇頁。
- (37) 近代日本における「幽玄」の捉えられ方については、鈴木貞美・岩井茂樹(編)『わび・さび・幽玄——「日本的なるもの」への道程——』(水声社、二〇〇六年)を参照。
- (38) なお松浦一は一九二四年五月に『文学の白光』と題する著作を出版している(大日本図書刊)。
- (39) 久松潜一「国文学を流れる三の精神」(『観想』一九二六年十月号) 一一—一八頁。
- (40) 安田「国文学の時空」第三章を参照。
- (41) 久松が大学生時代、恩師(のちの岳父)の佐佐木信綱に寄せた私信には「茂睡契沖等を通じて観たる元禄の歌学、殊に伝授破壊思想の研究をいさゝか試み居候(中略)茂睡の峻烈なる態度は痛快の極みに候」という発言がある。これは久松の元禄時代への関心の原点をよく示したものとと思われる(『心の花』一九一七年九月号、七五頁)。
- (42) 久松潜一「上代日本文学の研究」(至文堂、一九二八年) 一一—七頁。「日本精神と日本文学史」の末尾には(昭和三年一月)という執筆年月が記されている。
- (43) 久松の西欧思想への留保と日本的なものへの傾きには、マルクシズムが領導した大正末から昭和初めの青年たちを取り巻く思想の状況への反応という側面を考える必要があるかもしれない。東大新入会にも国文学科学生の参加が見られた。H・スミス(著)松尾尊兌・森史子(訳)『新入会の研究——日本学生運動の源流——』(東京大学出版会、一九七八年)二九—一三〇七頁を参照。
- (44) そうした事実の集積としての国文学研究の受動的な消費者のうちで大きな位置を占めたのが、大正末以降とくにその数を増した、文部省による中等教員検定試験(いわゆる「文検」)受験者である。事実出版元による広告文では『日本文学評論史』を「国文学者の必読すべき良書であり、又文検受験者絶好の参考書」と謳っている(『日本文学評論史 総論・歌論篇』至文堂、一九三八年、巻末広告)。
- (45) しかし『日本文学評論史』が刊行されはじめて一九三〇年代後半、文芸学論争にうかがえるような理論志向の風潮の中では、久松の批評史は「事実在即する態度」に貫かれているもの「ある見地からまとめられた歴史叙述」を欠いており、

「叙述がやや平面的であり現象の逐条並列的な傾向」があるという批判を受けることになる（風巻景次郎「新刊紹介 久松潜一著『日本文学評論史』『文学』一九三七年一月号、一〇七—一〇九頁）。

(46) 久松潜一「批評史の研究に就いて」(『国語と国文学』一九三六年七月号) 一一九頁。

(47) 久松自身がセイントツベリに対して否定的であるにも関わらず、注(44)で引いた広告、注(45)で引いた風巻による新刊紹介、さらに後年の吉田精一などがみな久松をセイントツベリに比しているのは興味深い。吉田精一「久松先生と文学評論史」『吉田精一著作集 別巻一』(桜楓社、一九八一年)を参照。

(48) 久松のスピニングガンに対する関心は、スピニングガンがルネサンス研究者であったことによるものであろう。「批評史の研究に就いて」のなかで久松は、スピニングガンの著書 *Literary Criticism in the Renaissance* (一八九九年初版、一九二五年五版) がペイターとは異なった「論理的な傾向」をもち、「文芸復興の中心の思潮をつかんで、その思潮を闡明しよう」としていることを評価している。

(49) アメリカに関心した René Wellek, *A History of Modern Criticism: 1750-1950*, vi: *American Criticism, 1900-1950* (New Haven and London: Yale University Press, 1966) 4-6; Gerald Graff, *Professing Literature: An Institutional History* (Chicago: University of Chicago Press, 1987) を参照。

(50) Graff, *Professing Literature*, pp. 126-128 を参照。

(51) ここで付言すれば久松も、教育の場での必要性が研究態度に影響したことを証言している。久松によると、一九二三年に東大で『万葉集』の授業を担当した折、「講義をはじめてみると、文献学的な処理だけでは文学の本質にせまってゆけないように感じたし、文学を通して人間はいかに生きてゆくかという点にふれるためには文芸学的な態度をもとらざるを得なくなった」という(久松「年々去来」一七五頁)。「万葉集の新研究」に見られる本質論はそうした授業の場での要請から生まれたものだと考えられる。日本においても文学研究史の考察にあたって、文学教育の状況を考慮する必要があることをうかがわせる事例である。

(比較文学・国際文化学部教授)